

平成 23 年 2 月 27 日

平成 22 年度総研大全学教育事業実施報告書

申請区分	学融合教育事業 総研大レクチャー
プロジェクト名	科学コミュニケーションと研究者のキャリア
申請代表者 (事業実施責任者)	研究科：高エネルギー加速器科学研究科
	専攻：加速器科学専攻
	氏名：森田 洋平

## ■要旨

現実の科学研究は社会の中で行われる「社会的行為」であり、今後の科学者は、社会における科学の役割、科学における社会的側面について無関心では済ませられない。

本講義の目的は、科学者を目指す若い大学院生へ、科学コミュニケーションの基礎を身につけてもらい、社会と科学の関係について考える出発点を与えるものである。

## ■事業概要

2010年9月7日から10日まで3泊4日で講義形式と実習形式による科学コミュニケーションの基礎を習得するコースを実施した。時間割は以下の通り。

		Sep/7 Tue	Sep/8 Wed	Sep/9 Thu	Sep/10 Fri
1	9:00- 10:30				
2	10:40-12:10		研究成果がニュースになるまで 倉田	アートと科学 吉岡悟(写真家)	研究機関と広報 倉田
3	13:30-15:00	科学コミュニケーション概論 森田	科学者のアウトリーチ 眞山	研究者のキャリア 眞山	広報の評価について 森田
4	15:10-16:40	科学と社会 平田	マスメディアと科学Ⅰ 保坂直紀(読売新聞)	マスメディアと科学Ⅱ 中島重彦 (日経サイエンス)	マスメディアと科学Ⅲ 坂元志歩(NHK)
5	16:50-18:20	実習 オールラ自己紹介と 相互評価	実習 自己紹介文章と 相互評価	実習 出前授業企画書と相互 評価	パネルディスカッション

## 科学コミュニケーション概論

社会に受容される研究者の情報発信について

### 科学と社会

研究者のコミュニケーション能力が必要となってきた社会的背景

### 研究成果がニュースになるまで

様々な情報の受け手を意識した文章の作り方について、プレスリリース作成からニュースになるまでの流れを実例として

### 研究者のアウトリーチ

研究者によるアウトリーチの実例（出前授業、サイエンスカフェなど）を大学共同利用機関での活動を中心に紹介する

### マスメディアと科学 I II III

社会の眼を代表する立場から、科学記事や科学番組がどう作られるか、なにがニュースになるのかを新聞記者、科学雑誌編集者、テレビ番組制作者が紹介する

### アートと科学

芸術家の目線で科学や研究の現場で感じたことをベースに、科学を伝える際に情報の受け手に対してアートが果たす役割を紹介する

### 研究者のキャリア

政府や大学などの施策と博士号取得者のキャリアの変遷についてレビューし、自らのキャリア形成のきっかけとする

### 研究機関と広報

研究機関はなぜ積極的に広報を行うのか。個人の広報との類似点、相違点、研究者に望まれる広報リテラシーについて

### 広報の評価について

広報を評価する試みについて海外の例などを参考に紹介する

### 実習

自分の研究分野の面白さを高校生に伝えるための出前授業を企画することを想定して、研究テーマに即した口頭による自己紹介、文章による自己紹介、イベント企画案の作文を実習で学び、相互に評価することで、コミュニケーション力を身につける

### パネルディスカッション

4日間の講義と実習を振り返り、研究者が習得すべき科学コミュニケーションについて講師と学生がディスカッションを行う

平成 22 年度の参加人数は総研大学生が 6 名（うち 3 名は聴講のみ）、他大学の大学院生 1 名であった。また、テレビ会議による講義の遠隔視聴が 14 名ほどあった。



講義風景

プログラム終了後のアンケートによると、参加した学生のコミュニケーション能力向上に対するモチベーションは極めて高く、研究機関の広報担当者やマスメディアやアートの現場に携わる科学コミュニケーションの具体的な体験談など、すべての講義において高い満足度が得られた。また、実習で自分の研究分野を交えた自己紹介や出前授業の企画を通じて「実際にイベントをやってみたい」という意欲を持つことができた。

## ■今後の事業展望

受講した学生数が少数であったことから、講義、実習、合宿中の懇談などを通じ、全体的に極めて密度の高い科学コミュニケーション能力養成のためのプログラムを構築することができた。

今後は基本となる教材を整備し、受講前の予習や受講後のコミュニケーション実践の機会を提供するなど、受講の効果をより高めるための企画を検討していく。

また遠隔地から講義のみ受講を希望する学生のための E ラーニングについて、対応を検討する。

実験などで忙しい学生が受講しやすくするために、次年度は夏休み期間中に開催する。

## ■その他

新聞、雑誌、テレビ番組の一部など、著作権法上保護されるべき素材が講義の中で用いられるため、授業を E ラーニングとして収録し受講学生以外のものが利用する際の注意など、諸手続き等についての規約等を整備していただければ幸いです。